

「聞」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

ふきのたう秋田音頭は祖母の歌 水谷 光子

(ヤートーセー) コラ、秋田音頭です。(ハイ、キタカ
サツサー、コイサツサー、コイナ)。秋田県の民謡であ
る秋田音頭は、七・七・九を基本としたリズムに乗せて
面白可笑しく、時に猥雑に歌い上げる。歌詞はいろいろ
のバリエーションがあり、そのコミカルなリズムはもは
やラップ。掲出句の「秋田音頭は祖母の歌」からは、作
者の祖母も即興で元氣よくラップしていたことが窺え
る。季語の「ふきのたう」からは秋田路が連想され、一
句全体が秋田愛に満ちている。もし俳句が七・七・九の
形で誕生していたなら、句会もラップで行われ、もっと
楽しい笑いに満ちていたことだろう。

いぬふぐりピカソの青に遠けれど 持田きよえ

犬ふぐりの花の色は仄々としていて好きである。日向
で見る犬ふぐりと日陰に咲いている犬ふぐりとは色調
が異なるが、その淡い青はとてもチャーミング。

さて、この句。犬ふぐりの青はピカソの「青の時代」
に使われた青と比べ薄いけれど素敵だわと言っている。

「遠けれど」は犬ふぐりの青を卑下している訳ではない。
ピカソの使ったプルシアンブルーも素敵だけど、犬ふぐ
りの色もそれ以上に好きだわと。「遠けれど」の独白に
作者の心が全て凝縮されている。

薪ストーブ分厚き忍野村々誌 森尻 禮子

忍野村は「忍野八海」のある村といえれば解かつてもら
えるか。ぼくにすれば、東京都に檜原村あり、山梨県に
忍野村ありといえるほど好きな村だ。その忍野村を訪ね
た作者。たまたま忍野村の歴史を記した村誌を手にし、
その分厚い本に感銘している。分厚いということはそれ
だけの長い歴史や、民俗、地理、産業などが事細かに、
丁寧に記載されている証。ストーブで暖をとりながら頁
を繰っている作者の顔が見えるよう。この句は「薪ス
トーブ」の薪が忍野村の歴史の一端を物語っており、薪
の発見がこの句を豊かにしている。

根のうねり長き樹齢の桜咲く 八尋 信子

老木らしい桜大樹。ごつごつと根がうねり、樹齢如何
ばかりかと思われるほどの桜だ。作者は勿論その樹齢に
遥かに及ばない。それだけにこれからの人生、この老桜
にあやかり、長く生きてみたいと思っても不思議ではな
い。桜大樹の魂に触れた一句。

花曇り都電ゆらゆら鳩翔たす 山田 雅子

都電荒川線。桜の見所はたくさんあるので、一日券を買って何度も乗り降りしてみる。飛鳥山、面影橋。桜はそうでもないが鬼子母神も素敵で途中下車。梶原という駅で下車すると「都電もなか」を売る店もある。都電は肩をゆすりながら進み、この句のように鳩を追い立てる。花曇りの一日。「ゆらゆら」にのんびりと寛ぐ様子がよく描かれている。

入学の朝もTKGを掻き込みて 横須賀智子

TKGって？ 正解は「卵掛けご飯」の頭文字。俳句もこうした符号が入ると面白くなってくる。DSが「どうかしてる」の略で、こういうノリの遊び。この省略語はWHOやJAL等とは違う。日本語の頭文字を取っての英字化である。例えば昔の松竹歌劇団がSKDだった。日本放送協会がNHK。なんだ、昔から在ったじゃない。その方式でいくと、未確認飛行物体はMHBとなるが、解かるだろうか。TKGがNHKのように定着するかはこの句の命運と「卵掛けご飯」の一層の普及に掛かっている。作者の好奇心に敬意を表しこの句を採り上げた。

心平と一茶の蛙とび跳ねる 東 祥子

蛙の詩人といわれた草野心平と「やせ蛙負けるな」の

小林一茶。その兩人を偲び讃えた一句。二人も入れて全く違和感が無いのは作者の巧みな技、芸に由る。「とび跳ねる」に、迸る新鮮な生命を感じる。

触れてみてしんと冷たき椿かな 伊澤やすゑ

椿と他の言葉との取合せではなく、椿そのものの感触だけを一句に仕立てた句。椿の花の根源、本意を作者は感触を頼りに詠む。季語そのものを詠むのは案外難しく往々にして類想に陥るものだが、この「しんと冷たき」は言い得ていて納得する。読者の手にもその冷たさが伝わって来ることだろう。

鞆や生きるをもつと面白く 市村 啓子

前向きな句で、晩年はもつと面白く生きなければと謳う。鞆と「生きる」から黒澤明監督の『生きる』を誰しもが連想し、余命幾ばくも無い主人公役の俳優志村喬を思う。命短し恋せよ乙女。この句の「生きるをもつと面白く」はなかなかのコピー、元氣一杯で結構。

かげるふや我が身焼かるる音に似る 岩根 甲

「生きるをもつと面白く」の一方で、毎日「生きる」を更新している方が居る。陽炎の揺れようから音をゆらゆら感じ、それが「我が身焼かるる音」に似ていると、

作者は詠む。この明日の命さえ分らない作者に対し、「面白く生きよ」とは決して言えない。「我が身焼かるる音」を想像だにしない私たちである。心よりお見舞いを申し上げたい。お身体お大切に。

芽柳のタクトよわれも歌はねば 牛込はる子

柳の芽吹き的美しいこと。その芽が風に揺れて、それはまるで指揮者の振るタクトのよう。そう感じた作者は「われも歌はねば」と、柳からの誘いに乗る。柳も歌い作者も歌う。この自然との一体感に仄々としたものを感じた。人間が忘れてしまった魂の共振。

白髪に止まる花びら若返る 内海 範子

木の葉髪に白いものが混じる。来し方を振り返り晩年に近いことを何となく悟る。そんな気でいたら、その白髪に桜の花びらが舞つて来て止まった。梅でなく、辛夷の花びらでもなく、桜である。花吹雪だろうからそれは見事に白髪を埋め、美しい御髪となり、まるで若返つたよう。この句、「若返る」の喜びように実感がある。

紅白の斑濃を誇る源平桃 大下 壽櫻

花桃の一品種で、一本の木に紅白の花が咲く源平桃。源氏が白で、平氏が紅。確か東京の向島百花園で見たこ

とがあつた。この句では、その紅白の花が斑濃を誇つていると詠む。光輝くその花々は作者の目に神々しく映つたことであろう。「斑濃を誇る」は的確な表現。

手抜きせし五体いとむたんぼ野 太田 裕子

〈声挙ぐる庭の桜よ退院す〉〈病み上がりの六腑潤す蜷汁〉に続き退院後の感慨を記す。「手抜きせし五体」とは無我夢中で生きてきたが健康への過信があつた、自分の身体の手入れを怠つてきた、ということ。退院後は養生につとめ、我が身をいとおしむ作者。野のたんぼは達がその作者を明るく迎えている。

春休み土手に自転車集まりぬ 小河原政子

子ども達が一斉に自転車に乗り、集まつて来る。さあ今日から春休みだ！ 三学期までが終り、ここで春休み。春休みが終ると、一年進級し新たな学年が始まる。新しい教科書も春休みのうちに届く。クラス替えもあるし、子ども達も何かと忙しい。そんな合間を縫つて仲間同士土手まで自転車飛ばす。この土手に寝転んでお弁当を食べたいなと、春が呼び掛ける。懐かしい風景である。

鳥の巣よ今年も校舎借りたのね 金子かほる

毎年、校舎のどこかに巣を作る鳥。何の鳥だろう。燕

かも知れぬ。今年も早々とやって来て巢作りに余念がない、この鳥。親しみの湧く鳥らしく作者は「借りたのね」などと、料を作つて呼び掛けてゐる。その優しき。

観音は日露の遺骨八重桜 金田 知子

この観音様の謂れを作者から伺つた。日露戦争で亡くなられた日本兵の遺骨などで作つた観音様という。思えば日露戦争は最後は勝つたものの、際どい戦いで死者も約8万4千人と多くの若い命が失われた。追善の石碑は至る所にあり、国分寺市内では満福寺の境内に幾つかの立派な碑が立っている。二百三高地で死んだ人、戦場の川で溺れて死んだ人。掲出の句の八重桜は、彼等の命の輝きそのもので、その美しさに圧倒された。

行人のきのふと違ふ春帽子 金田 喜子

顔見知りかどうか知らないが、昨日も道で出会つたその方の帽子に注目した作者。あれ、どこか昨日と違うなと。昨日と今日とは何か雰囲気がおかしい。そうだ昨日とは違う帽子を被っている！ そのような発見がこの句を作らしめた。春帽子が季語としてとても効いていて、帽子を取つ換え引つ換え被つてみる春の心の華やきを感じられる。

馬跳びをかはるがはるに遠霞 菊地 孝枝

今はおしとやかだが、少女の頃は平気で馬跳びをしていたという。そういう方が句会で何人も居たので驚いた。馬跳びは男子の遊びだと思ひ込んでいたばかりの偏見を、この句は正してくれた。「かはるがはるに」の躍動感、重量感。遠霞は実景なのだろうが、作者の遠い思い出とも読め、懐かしく思われた。

丹沢の嶺嶺をひとつに春霞 北 好夫

多摩地方から見える丹沢山地。モノレールの車窓にも晴れた日には富士山の横にその山々が見える。最高峰の蛭ヶ岳をはじめ一五〇〇メートルを越える山が九座も。この句は、棚引く霞が嶺嶺を一つにしているという雄大な景を提示している。「嶺嶺をひとつに」が巧み。

笛吹けど海よむかしの春ならず 久保田勝一

極私的な句だ。作者の感慨が「海よむかしの春ならず」。海との思い出。誰でも然うだが、作者の来し方は順風満帆でもなく、苦悩に苛まれた時期もあったことだろう。思い出は美しい。記憶には美しいことだけが最後は残る。感傷といえは感傷。出だしの「笛吹けど」は唐突な感じがするけれども、それとその下のフレーズとの乖離が何とも言えない味わいを見せている。

ダム底へ沈みし村や遠蛙 栗原 季星

東京では例えば奥多摩摩湖の小河内ダム。ダム建設時に旧小河内村や丹波山村の鴨沢の集落が湖底に沈んだ。掲出句は蛙の声から、かつてダムの底へ沈んだ村を追想する。その遠くより聞こえる声は、村がまだ存在した時に鳴いていた蛙の声だったかも知れない。♪夕陽は赤し身は悲し／涙は熱く頬濡らす／さらば湖底のわが村よ／幼き夢の揺籠よ（東海林太郎『湖底の故郷』昭和12年）の唄を思い出した。全国至る所に在るダムの村。殉難碑が必ず建ち、これも哀しい。

春雷や坂本龍一力尽き 小坏あゆみ

今年の三月二十八日に逝去した現代音楽家の坂本龍一。まだ七十一歳だった。彼の音楽の歩みや、病気のことで、後年の社会的活動なども僕は殆ど知らないが、その早い死を悼む。龍一の音楽で知っていることと言えば浅川マキの八枚目のアルバム『流れを渡る』（昭和52年）の中の「あの人は行つた」の曲に彼がオルガンで参加していたことくらい。二十代後半の演奏。素晴らしかったので記憶に残っている。さて、この追悼句。「力尽き」が一切を語っている。あの体でよく最期まで頑張つたなあ。と。「春雷」の「春」が救いでもある。

菜の花や平凡を何よりも愛す 小泉まり子

〈菜の花や月は東に日は西に 蕪村〉〈菜の花の黄のひろごるにまかせけり 万太郎〉〈べたべたに田も菜の花も照りみだる 秋櫻子〉と、菜の花は特別な花というより身近な花である。花期が長く、何時も咲いているというイメージがあるので「平凡」と目に映つても可笑しくもない。この句の「平凡を何よりも愛す」は菜の花のことでもあるが、作者の生きる姿勢でもあるのだろう。

二丁目の交番春はいつも留守 幸喜美恵子

「春はいつも留守」と言われてみると、そうだなと思う一句。交番にはよく「巡回中」の札が下げられているが、人間の活動が活発となる春ともなればその回数も多くなるのかも知れない。別に二丁目の交番でなくても、三丁目でも四丁目でもいいけれど、二丁目は面白い。

青空やよいしよと揺るる八重桜 小濱けえ子

この「よいしよ」が八重桜の重たさをよく表している。大づかみだがその把握は鋭い。青空と色の濃い八重桜の対比も美しく見事。「よいしよ」というと大相撲の弓取り式の時の観衆の掛け声を思い出す。この句を読む際にも是非「よいしよ！」と腹から声を出し読んで頂きたい。

遠足や刻みどほしの数取り器 小林ゆきお

「刻みどほしの数取り器」はカウンターだろう。遠足児はちよこまか動いてどこかへ行つてしまつたりするものだから先生は気が気でない。出発時の人数を保つていか集合させて頭数をいちいち確認しなければならぬ。まさに「刻みどほし」である。この句は焦点を「数取り器」に絞りに成功している。「刻みどほし」が大発見。

墨堤の翁と贅沢花見かな 小林 玲

贅沢花見が魅力的。どんな贅沢だったのか明らかにされていなくても、隠されている分、読者には想像が許される。幕末から明治初頭にかけての江戸町人の日常を事細かに記録した鹿島萬兵衛の『江戸の夕栄』に花見のことが書かれている。「飛鳥山、向島の無礼講的の方興味多きゆゑ、この方に人多し」。かなり賑やかだった様子。この句の墨堤の翁は勿論明治以降の人だろうが、花見の醍醐味を十分知り尽くしている御仁と思われる。「花見かな」の「かな」は、一緒に花見した作者の悦び。

「哀愁の第二句集」を読む春思 斉藤久美子

この句にハツとした。私の第二句集『蓬生』の帯にある文言だからだ。これは私が直接付けたキャッチコピーで敢えて「哀愁」と謳った。それをご覧になった私の前

の編集長の禰寝雅子さんが「哀愁だなんて嘘つばちねえ、笑いこけたわ」と仰った。実はとても明るい句集で、この句集なら今でも人にお薦めできる。それを斉藤さんは再読してください。感謝。「春思」が解けますように。

名古屋発近鉄線や風光る 佐藤 和子

名古屋と近鉄線と固有名詞が二つ並ぶ。歌謡曲にも、「上野発の夜行列車」「京都から博多まで」「長崎から船に乗って神戸」などがあつて、これは物珍しいことではない。ただ、「風光る」がいい。風光るは「風にゆらく風景のまばゆいような明るさ」と歳時記にある。

雛納め互ひの老を肯へり 島 昌子

「互ひの老」は夫婦のことではなく、作者とその雛人形のことを指す。納める時に双方顔を見合わせ「貴女も年を取つたわねえ」と。これは嘆きではなく、長く付き合ってきたことへの阿吽の賛辞。老を肯うというのはなかなか出来ないものだ。年を重ねて到達した心映え。

しばらくは三月の掌を握りをり 嶋谷 宗泰

三月は何かと別れの多い月。学校では卒業、勤めでは転勤・退職など。この句の「三月の掌」も作者から去つて新たな人生を歩んでいく人と思われる。或いは、東日

本大震災の起きた三月という大きな魔物を思い描いてもいいだろう。何万もの人々が手さえ握れずに、この世と、親しい人たちと別れていった。その鎮魂の心をこの句から受け取つてもよい。「しばらくは」に惜しむ心がある。読者はこの二つの掌から温もりを感じればいいのだ。

啓蟄や声よく通る草野球 清水 悠太

「声よく通る」と「啓蟄」の言葉がうまく響いている。選手のかきかきびびした動きがこの一句から窺える。それから今はどうか知らないが、野次。少年野球でも「バッター打てないよ！」などの声上がる。草野球では味方選手を野次することもあり、こういうチームは勝てない。

天涯の夫よりさくらさくらかな 首藤 久枝

夫恋の句。今年の桜も花期が長く、大いに目を楽しませてもらった。その桜を作者は亡き夫の恩恵と受け止め「さくらさくらかな」と詠む。枝も撓むほどにこんもりと咲く桜。来し方を振り返りつつ、これからも夫の見守りの中で強く生きていこうとの思いも感じられる。

辛夷咲き三年会はぬは嘘のやう 正田 和子

会えなくなつてどれくらい経つのだろう。新型コロナウィルス禍での三年間。外出もままならぬ日が続き、親

しい友と会うことも憚られた。ひたすらその終焉を待つ三年だった。その間も辛夷の花はいつも通りに咲き今年も春の先駆けとして白い花をほころばす。それなのに、まだ会えない。「三年会はぬは嘘のやう」の実感は真実。いつ会えるのかと、作者の嘆きは尽きない。

ストーブを消して日差しの中で書き 菅原 淑子

春の日が差し込んで暖かい窓辺。ずっと点けていたストーブは、今日は要らない。それを消してその日差しの中で何か書き物をする。北国の春はこのようなことから始まるのかと、作者の暮しを思う。ささやかな日常から詩情が滲み出ていて好感を持った一句。大上段に構えて句作しなくても、詩は自分の回りに在る。

ぼぼとは抜けぬたんぼぼの根のやくかいな 新海あぐり

坪内稔典氏の代表句へたんぼぼのぼぼのあたりが火事ですよを踏まえての労農俳人の一句。耕しの時期に畑の蒲公英を抜こうとせずいぶん手こずっている様子が目に見える。根の張りが強く、簡単に「ぼぼ」とは抜けないのである。「やくかいな」は「厄介な」。自然と一体になつて生きている作者ならではの句で納得した。

入学児光の門へ駆け出しぬ 杉淵真喜子

小学校入学おめでとうと祝われ、入学児が初めて学校の門をくぐる。父母の手から離れて心細いことこの上ないが、直ぐに仲のいい友だちも出来て、親が思うほどの心配は要らないようだ。何より父母より未来がある。羽搏く時間がある。この句の「光の門」はその輝かしい未来への門。門も入学児も眩しいばかり。

啓蟄や部活始めの新ボール 鈴木 藤子

この句も「啓蟄」と「新ボール」の取合せで、春動く情景を映し出す。新学期が始まり、クラブ活動も新入生を迎えて練習を開始する。まだ汚れを知らない新しいボールを手にし、生徒たちも一から土にまみれ汗にまみれて栄光への道を進む。彼等に幸多からんことを。

星めざす糞ころがしの心意気 高橋 章子

糞ころがしという生き物は、動物の糞を食べるコガネムシ「糞虫」の仲間。地中の巣穴に糞を運び、玉状にしその中に卵を産む。それを転がしながら運ぶので、糞ころがしと呼ばれている。古代エジプトではその玉状の糞を太陽に見立て太陽神として崇めたとか。掲出句の作者は、その糞ころがしがよいしょよいしょと一生懸命転がしている心意気に感嘆。上五に「星めざす」を置き、この虫の奮闘ぶりを美しく映像化した。ロマンある一句。

（われら餅食ふ糞ころがしは糞ころがす 加藤楸邨）

買ひ過ぎて自戒の念に春の風 高橋満利子

豊かな人でも貧しい人でも、程度の違いはあれ「買ひ過ぎた」という気持ちを抱くことがままある。衝動に駆られ、買わなくてもいいような物まで買ったり買わされたり。帰宅して、それこそ自戒の念に囚われる。こういう些細な人間の心の動きをこの句は詠んでいて面白い。いよいよ春。外出の機会は沢山ある。ご用心ご用心。

防犯ブザー揺らし走る子風光る 高橋美智子

首からぶら下げる防犯ブザーなのだろうか。危険な社会で暮らさざるを得ない子どもたち。昔はこんなことまでしなかったが、その代わり戦争の御蔭で大勢の子どもが死んだ。現代は現代の危機があり、その中で元氣よく健気に走っていく子ども。この句は「風光る」を下五に据え、子のまばゆいばかりの成長を優しく見守る。

春の水草田男句碑のゆるぎなく 竹森 美喜

立川からモノレールを使って行ける根川緑道。そこに中村草田男の（冬の水一枝の影も欺かず）の句碑が立っている。水辺に独り身をおいているうちに完成した一句といわれている。「いつしの／かげも／あざむかず」の

氣迫ある韻が、透徹した冬の厳しい自然、殊に冬の水面と響き合い、格調高い句に仕上がっている。竹森さんのこの句はその草田男の句に和し、堂々たる句碑を「ゆるぎなく」と表現。かつての「冬の水」は温かな「春の水」となり、時は流れた。草田男追慕の一句。

けものみち多き世田谷名草の芽 田中 京

この冬は狸出没が報じられた世田谷。荏原郡世田谷村は大正十二年に世田谷町となり、昭和七年十月に市郡合併により世田谷区（世田谷町、松沢村、駒沢村、玉川村）として東京市に編入されている。村だったから当然狸も出よう。いろいろの草が萌え出てくるのも村の名残か。この歴史ある世田谷に作者は住み、温故知新、新しいものからも力を載っているようである。

遠き祖は魚類か水か目借時 寺田 幸子

蛙の目借時。人間は眠くなる。そんな時に自分の生物としての出自が脳裡をかすめたのだろう。「遠き祖は魚類か水か」。水より魚類を先に出しているところを見ると、作者は自分の性格や容姿から魚類を遠い祖先と想像したのかも知れない。或いは泳ぎが上手なのかも知れない。

「水を得た魚のよう」という言葉があるが、俳句という文芸に日々勤しむ作者は正に、水を得た魚だ。

散るなかれ風なき昼の句草 長井 敦子

句草は梅の異名。梅の香りから名付けられたのだろう。風に散りやすいこの句草に「散るなかれ」と作者はいう。注目するのは「風ある昼」ではなく「風なき昼」。「風ある昼」では当たり前過ぎて興覚めするが、この句は「風なき昼」と逆のことを言つて、読者を立ち止まらせる。風が吹かなくても梅はいずれ散る。梅が香を楽しみながら、ふとその散り様が脳裡を掠めたのかも知れない。

雉鳩の胸ふくらませ尾根の春 中嶋きよし

尾根で見掛けた雉鳩。雉の雌に体色が似ていることからそう呼ばれた由。山鳩ともいい「デーデーポッポー」或いは「ホーホホッホホー」と囀る。早朝に鳴くことが多いそうである。この句は何と言つても「胸ふくらませ」が清々しい。尾根の春に相応しい一句だ。

清明や天然水で飲む薬 中村 敬子

清明は清明節で、陽暦四月五日頃。天地万物の気が満ち、清く明らかになる時節というから目出度い。その日に飲む薬も、いつもなら水道の水であるところを今日に限つては天然水で作者は飲む。きつと御利益があり健康にも良いのだろう。自動販売機でも天然水と銘打ったものは売っているが、ここでは阿蘇の名水と理解したい。

昇天の友から電話万愚節 中村 東子

エイプリルフルの和訳は四月馬鹿、或いは万愚節。人をおついだり驚かしたりしても許される日で、俳句では少し切ない（万愚節恋うちあけしあはれさよ 安住敦）が夙に有名。掲出句は句会に出された句で、「昇天の友」は百歳近くまで生きて亡くなった作者の知人だという。実際に天国から電話が掛かってくることは無いが、そこは万愚節。作者の耳には声が聞こえたという。これも何か切ないが。

尼様のさまになりたる花談義 中村 幹子

桜の話で盛り上がるその中心に尼様が居る。惚れ惚れするような肌の艶、顔の艶をお持ちで、参詣の者たちになんて話をしてる。その場面を作者は「尼様のさまになりたる」と詠んだ。尼様らしい豊かな表情で、時にはユーモアも交えた花談義をされているのだろう。「尼様のさま」の言葉の幹旋に作者の個性が光る。

せつかちとのんびりとゐて木の芽吹く 野沢 慶子

まあ可愛らしい句。木の芽にも人間のようにそれぞれ性格がある。せつかち組とのんびり組。芽吹くにもずんずん吹く芽と、急がずにゆっくり吹く芽と。何か童話を読んでいる気分になってきた。

初蝶の辺りをはらふ黄なりけり 橋本 恭子

今年初めて見た蝶の色は黄色。その黄の色がこれまでとは異なり少し濃かったのか、辺りをはらうように感じられた。「はらふ」は「祓ふ」。初々しく世の穢れを除いて飛び、水戸黄門のように周囲を平伏させる。「なりけり」の断定が重々しい。この句、「初蝶」に納得。

足場組むメットの綺羅や春兆す 長谷川菊男

建築現場。プロ中のプロがぎびぎびと足場を組んでいく。被っているメット（ヘルメット）が動くたびに光を放つ。その光の綺羅に作者は春の兆しを感じた。「春兆す」は「春めく」。まだ寒い中で春が動く。この句は、ヘルメットの光に春の到来を把握した点が秀抜。作者の暮しにも明るい日差しが見えてきた。

外出のついで花見に紛れ込み 浜田 優子

「花見に紛れ込み」に抒情がある。いつもどおり暮しの延長で外出したところ、たまたま桜並木で花見の人混みに出くわした。花見を目的に出かけたわけではないのに、吸い寄せられるように花見客の中に入り桜の美しさに魅了される。桜や花見そのものを直接詠んではないが、花見の雰囲気十分に伝わって来て味わいがある。

難聴の耳朵こそばゆき初音かな 原田ミチ子

こそばゆいは、くすぐつたいという意。「背中がこそばゆい」と言うが、この句では耳たぶがこそばゆいそうそれが鶯の初音に因るところが面白い。私も数年前に耳鼻科で診察を受けたとき或る音域が聞こえにくいことが判った。ゆくゆくはこそばゆくなるのだろうか。

年重ね秘密がいつばい花ミモザ 春田 千歳

天地一杯にミモザの花が咲くその輝かしいこと。人生そのものだ。でも、こうして輝いているが、実は人に言えない秘密がいつばいある。この句の「秘密がいつばい」の「秘密」は読者それぞれが我が身を振り返って読み解けばよい。「秘密がいつばい」は思わせ振りの表現だが、この「秘密」は決して陰湿なものではなく、隠すほどでもない楽しく明るい秘密である。年を重ねることの苦しみなどおくびにも出さず一句全体が陽気に満ちていて、こういう句の作り方も長年の経験の力によるものと思う。

春炬燵ある日えいやと仕舞ひけり 平野 豊雄

春とは言え炬燵がまだ取れない。炬燵寝をする習慣がついていて、いつまでもだらだらと炬燵に入っている。その炬燵を或る日「えいや」と仕舞った作者は偉い。え

いやの気合は人生にけじめを付けた証。過去を清算して為すべきことを為すために作者は立ち上がるのだ。

鰻祭や数多の本を縦横に 福井 芳野

鰻祭は「鰻魚を祭る」の傍題で七十二候の一つ。二月十九日から二十三日まで。鰻は取った魚を先祖を祭るように岸に並べてから食べるといふ中国の伝承から来ている。掲出句では、魚よろしく、沢山の本を作者が並べている。「縦横に」と詠んでいるので書棚に並べたのだろう。その賑やかな光景が「鰻魚を祭る」そのもの。とにかく祭である。読者はその景を明るく感じればよい。

のどかさや見本とちがふおかめそば 本多 遊子

おかめ蕎麦は、蒲鉾や椎茸、三つ葉などの具で作られる。具の並べ方が福を呼ぶお多福「おかめ」さんの面を連想させるのでこの名が付いた。店によつては具に筍や鳴門、出汁巻き卵を加える。室町の老舗「砂場」では真ん中に海老が載り豪華。掲出の句ではそのおかめ蕎麦が店の「見本」と違ふと詠む。決して不平不満を詠んでいるのではなく、あれやこれやの些細なことが春の長閑さであることよと、洒落ているのである。